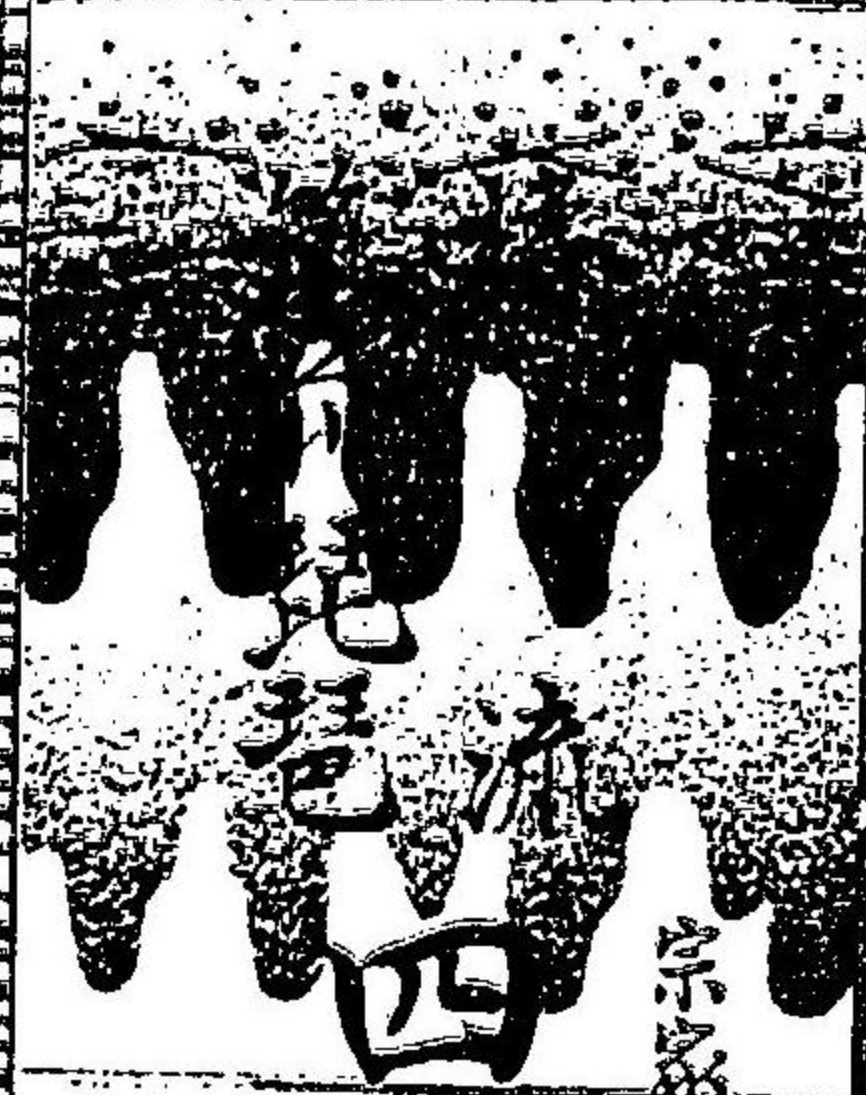
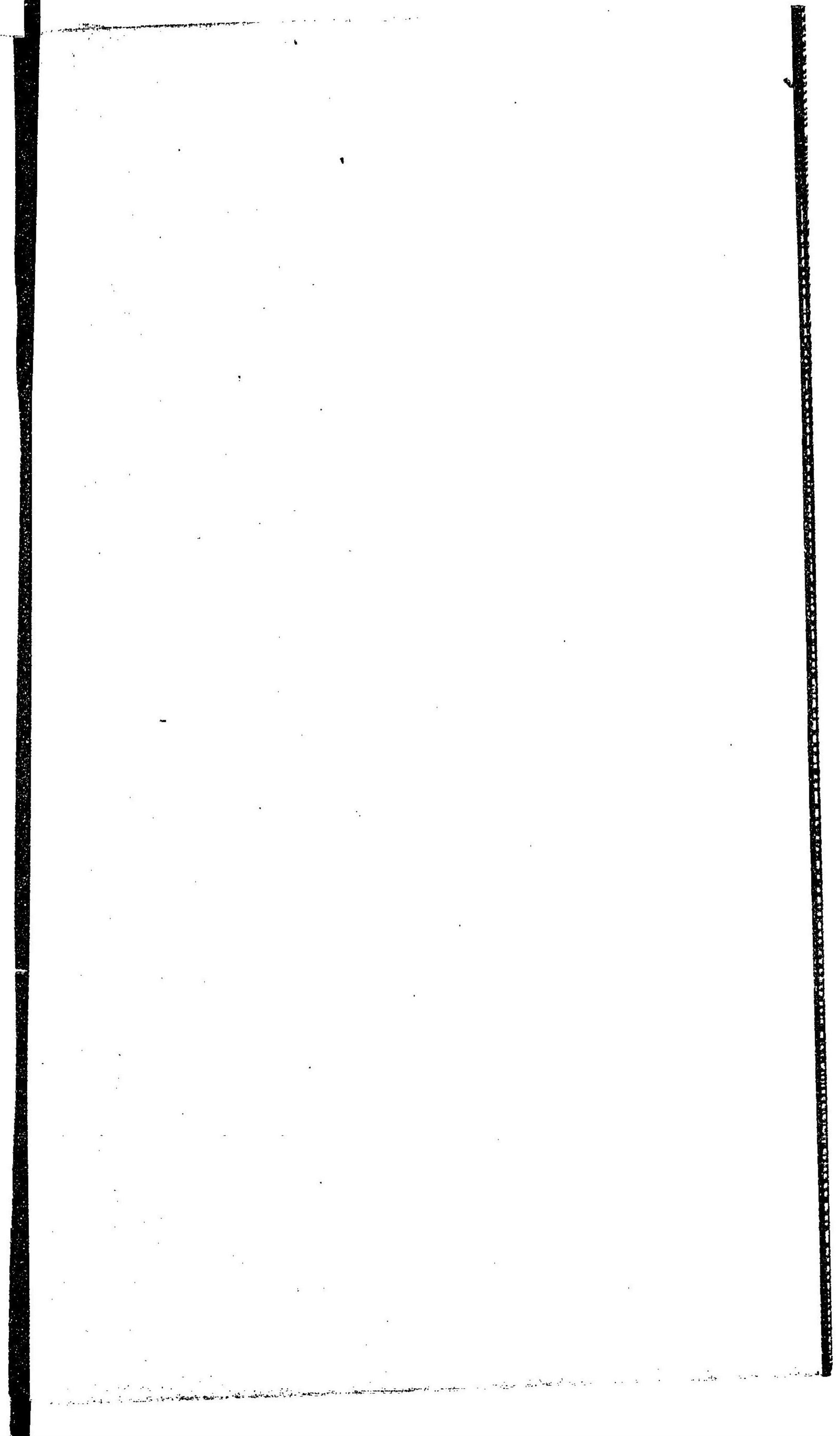


特



265

109



法
意
中
傳
緒

博

明治
43. 6. 27
内交

己酉初夏

柳江題



四條殿

玉蘭作

諸の椿左衛門尉正行は

尊民の老將高の師直

攻寄すまきの由を聞き

弟正時始め一族を率ひ

吉野の皇居に詣り

奏上し奉りけるは

此度賊軍来り犯せんとす

是れ臣が報効の秋にて候

四條殿

臣若一師直の首を獲ずば

正行が首を彼に授くべく候

俯して願くは今生にて

一度天顔を拜し奉り

臣等生涯の思出に仕らむと

忠義に凝りし精神は

濺ぐ涙に顯はれけり

天皇御簾を掲げせ給ひ

正行を召され宜はく

朕深く汝天子の忠義を慕

今朕が頼むところも

また汝等あるのみ

假令戦ひ利ありざるも

朕が為めに自重せよと

厚き勅語を賜りければ

正行感涙に咽びつゝ

御前を退き控へしに

畏き邊りの仰に依り

辨の内侍と呼ばれたる

見るも眩眩き上臆を

下賜ふとありければ 正行かたく辭奉り

とて世にながらふづゝもあらぬ身の

かりのちぎりをいかにむすばむ

かくなむ一首を捧げ置き 是ぞ最後の参内なりと

名残惜しくも皇居を出て 聴て先帝の御廟に拜別

如意輪堂の門扉に 鏃を以て姓名を記 其末に

かつらごとかねてたもはば梓弓

なまきかすに入る名をぞとむむる

絶命の和歌を彫附けや 是にて思ひ残す事更にな

いざ諸共に勇しく 賊と雌雄を決せんこと

三千餘騎を引率一

正平三年睦月初旬

四條畷に向はせける

此時已に高の師直は

河内の國に押入りて

飯盛山の麓に陣一

六萬の大兵を魚鱗に備へ

武威嚴重に見いけるが

素より死を極めたる楠勢

斯る大軍とも物ともせず

膽駒たろ一に菊水の

清き流れの旗一る一

打ひるがへ一悠然と

四條畷に指一掛れば

賊兵四方に群り寄り

唯一揉とあせれども

こころもかたき楠の

刃風に賊は斫立られ

一ば一勝負は荒鐵の

沸もかへらえ許りなり

時正行不意に敵の本陣に斬殺

あは師直討たれど見たりが

賊の勇士上山六郎左衛門高元

師直の甲冑を引懸出で

我こそ高の武藏守と伴り

ふせぎ戦ふ其間隙に

師直は辛ぶぐて遁れたり

斯とも知らず正行は奮戦

遂に武藏守と討取ければ

天地に拜し喜び給ひり

己にて其偽なるを知り大に怒り

逃る師直遁はせりと

勇を鼓して追継りしが

嗚呼痛まや正行も正時

急所の痛手に力盡き

残る股肱の人々も

身に百創を被りて

進退こゝに谷れり

左れば正行聲振上げ

今は、や是迄なるぞ

賊の手に獲らるゝ勿れと

遂に弟正時と交刺し

あはれ二十三歳と一期と

北に向ひて斃れける

さる程に辨の内侍は

正行の戦死を聞て泣沈み

いなむは容諾るに彌増る

公か真情に愕るとも

さばれ天子の御許受け

妾は公が妻ぞか

いかに節をば破るべきと

緑の髪も世の業も

思ひ切り捨て龍門の

里の庵にすみぞめの

衣かたしき正行の

冥福を祈り卒りけり

よしや吉野の山櫻

盛りもまたで北風に

散るといへど馨しき

名は千載の後までも

忠義の龜鑑と謳れて

青史に譽を留むる

明治四十二年六月二十日印刷
全 四十二年六月三十日發行

(非賣品)

發行兼
印刷者

大阪市東區和泉町二丁目一番地
有 村 彌 四 郎

印刷所

大阪市東區和泉町二丁目一番地
藤 井 改 進 堂
電話東二七〇番

發行所

大阪市北區東梅田町 達邑邸内
大 阪 旭 會
電話西二八〇三番

265

109

